

第二十六號

文明之母第二十六號目次

丁數

○論說

結婚論……………………ルイゼプルチル女著 中川重麗譯 一丁

○家政

育兒衛生法…………醫學士 關場不二彥 八丁

○文藝

拔刀隊の功績をおもひて…………福羽美靜 十三丁

近詠五首…………間島蒞信 仝丁

くさぐの歌 十四丁

靜女怨…………内田遠湖 十五丁

跋木村長門守夫人眞野氏訣夫書…………内田遠湖 仝丁

めのとの草紙ぬき穗 仝丁

○批評

浮城物語○萬國娼妓沿革○日本文學全書○閨秀新誌○女學生

○雜錄

豐臣秀吉の妻淺野氏……醫學士 鈍廼風流士 二十三丁

れしろいの中毒○哲學者の女房○インフルエンザに就て○女子教育論

群戯○雜記略抄の一段(寸草隱士寄送)○餘興‖雲下人‖蹙多子

○彙報 十數件

○寄書 (三篇)

附錄目次

怨を以て德に酬ふ…………醫學士 鈍廼風流士 三丁

酒の戒…………白川樂翁 九丁

不奇遇物語…………鐵鎚將軍 十三丁

本誌は毎月二回三日十八日に發行す

本誌は前金に非されば發送せず

本誌の定價は一册金六錢十二册半年分金六十八錢廿四册一年分金一圓卅錢

全國無遞送料

本誌の廣告料は「五號活字二十三字詰」當り左の如し

	(壹回)	(二回以上)
壹行	金八錢	金七錢
三十行以上	金七錢	金六錢
六十行以上	金六錢	金五錢

本誌の見本は郵券六錢を送らるれば呈す

本誌代金御回送の節は内國通運早達便又は東京郵便局へ御振込被下度

郵券代用は一割増

本誌の前金將に相切れんとする時は其卷の宿所姓名を朱書して發送すべし

版權所有

主筆 大矢森之助

發行兼編輯人 中村一 東京深川區諸町十三番地

印刷人 小西石造 東京深川區仲町八番地

發行所 東京日本橋區大傳馬町二丁目貳拾貳番地 生文社


前

文明之母第二十六號

明治二十三年六月三日發兌



○結婚論（承前）

中川重麗譯

若し夫れ二人が結婚するに當り、各自に眞知己となり、眞相識となり、世の習慣の爲めにするに非ず、又獨り情慾の引力よ制せられてするにあらず、各自に權利と義務との基礎と重んじ、相共同し相一致して、一の新小世界を開き、其問題は互に責任を充たすに忠實に、十分よ人の人たるの力を盡し、伎倆を顯はすに於ては夫婦なるもの毫も尊嚴を失はず、神聖と失はざること無論なり。然るに世の夫婦の有樣を觀察すること、愈〻密よ愈〻深きに於ては、喫驚せざるを得ざるものあり、即ち人世生活上に最も大切なる婚姻を行ふに、極て輕忽の處分を以てすること是れなり。殊に女子を然りとす。是に於て女子敎育の皮相は、忽ち先づ男子に向て復讎の怨を霽らすなり、即ち大抵の少女は結婚する

一

に當りて、唯暗黒なる觀念を有し、義務の如何に嚴正なるや、克己自制の如何に必要なるや、絶えて此等の事には思ひ到らざるを常とす。獨り女子のみならず、男子にも亦此の如きものあり。蓋し二人が最も眞面目に聽くべきは、彼の結婚の日の牧師の演述なり、然るに此の演述に毫釐の價値を置かざるもの極て多し。

眞に幸福なる夫婦といふは、唯精神的と感情的の開發の同等なる二人の間に在るとと必せり。是を以て畢竟多數の夫婦の不平和、不幸福なる所以は、此の二人が各其教育の度と異にせるなり。同一の事物に就て相異なる精神上の觀念を有し、相異なる感覺を有せるに在り。他の事物に於ては如何に似合はしき伉儷なりとも、其精神感情に於て其れ此の如くならんには、如何に親密ならんと欲するも得べからず終には乖離して或は相悪み、或は無同感の冷境に陷るは、避くべからざるの數なりとす。

二人が觀念の不同一は是れ最も大切なる點なり、殊に男子の方より結婚以前に之れを知了し、此の相似ず相類せざるの點は、如何なる結果と生ずるや、疾くに明斷ならしめざるべからず。氣質の不同、同種、天性の不同一は、固より双方親密なる關係に生活するに非れば、之れを知ること容易ならずと雖も、結婚せざる以前より、既に互に相知るものあり。然れども如何せん此の不同一、不似合の上に有する二人の掛念は、是等の事は日を

經る中に互に相平均せん、如かず早く結婚せしむるには、との語を以て擯斥せらるゝを多しとす。

惟ふに若し今の許嫁の時期を以て、日耳曼民種の古風俗の如く、眞に互に相試驗するの時期ならしめ、又既に二人が互に其相適せざるを知る以上は、許嫁の破談を一層容易ならしめ、加ふるに兩性共に年若きものをして、彼の舞踏より、彼の夜會より、他に適當なる機會を以て互に相識るを得せしめなば、今の許嫁の習慣に優ることと多くして世に幸福なる夫婦の數は、忽ちに多きを加ふるならん。或る論者は久しく相愛し、相識りたる許嫁の人にして、結婚後幸福を得ざることあり。尤も外部よりの關係より然るにあらず、されば互に相愛し相識るも其益なしとて、以上の論を擯斥すれども、決して然らず、畢竟是れ勢に乘じ、行き掛りとなり、退くに退かれず、人も亦一刀兩斷の語を此の間に入るゝに躊躇したるによるを多しとす。

外部の狀態が夫婦の幸福を妨害することも往々あり。此の弊害は勉めて除かざるべからず。而して之を除くには古來の習慣を除き、更に善良なる正當なる風俗を造り出さゞるべからず。蓋し新夫婦、新家政の不和不調の第一原因は、教育と勤勉とを以て之れを除き得べし。新夫婦は多く一家を開きて家政の基礎を置くに當り、必らず今ま

三

で父母の家に在りしよりは、一段も二段も階級の低き生活を以てせざるべからず。然るゝ大抵は父母と同一の生活を以てせんとす、是れ既に第一着を誤るものにて、富有の身代と雖も決して實行し能はざるなり。兩親の家を與せしが如く、自分も亦低き處より漸く高きに登るべし。初め百般の不自由あるも之れに滿足し、家政の狀態が之れを許すに至らざる間は、決して父母と同一の生活を思ふべからず。是を以て新婦の家に在りしときには、常に阿爺の旅道具の如く、車に乘せられたる身の上なりしも、既ゝ人の妻となり、其夫の身の上が未だ車上出遊の自由を與へざるときは、夫と同じく歩くべきは固よりなり。新夫も亦た昨日までは、海軍士官の如く、漂泊、家を定めぬ身の上なりしも夫となりては家政の事、家賃の事ゝも亦た心配せざるべからず。然るに若し一方殊に世事を能く解せざるの女子は、唯愛ゝ醉ふて生活の散文、即ち實務と嫌ふよりして、限り無き不平和を生ずべく、男子と雖も若し結婚の後、尚は依然舊の如くに氣儘に生活し得らるべし、若し息子の如く其收入は獨り自から浪費するを得べし、と想像せんには是れ亦不平和を生ずる禍因たり。今や人皆其分を知らず、生活の贅澤ならんを欲するが故ゝ結婚して別ゝ一家を開くものゝ少きは、家政の困難なるに因る。然れども少女を教育して主婦たり、家母たるの義務を辨せしめ、單に人形の如く教育せず、以て兩性の着眼と

理想的の尺度の上に置かしめなば、此の弊害は之を矯正すべきなり。世人動もすれば、曰く女子に與ふるの教育にして高きに過ぐれば、家政の義務を忘るゝに至ると、果して是れ眞なる歟。畢竟婦人の義務を辨へず、美服是れ愛し、逸樂是れ耽るは腦裏の空虛、實に之れが罪たり、決して書物の罪にあらず。彼れ書を讀みたるの分量は、殆んど奇零に等しきなり、書物何の罪かあらんや。彼れ實に憫然の一動物に過ぎざるなり、誰か其耳邊に母てふ神聖なる聲を與ふる者あらんや。

又女子の教育高等の文明に達したらんには、女子本體の最美最優の氣息を撲滅せずして、夫婦てふものゝ小天地をも脱却し得べしと想像するものあらんには、是れ亦惑迷の甚しきものなり。今や佛國より出で來りて、女子の運動に限りなきの弊害を與へ、又米國に於ても喧しき彼の「愛の自由」の唱道は、或は一時世人の雷同協贊を博し得ることあるも、決して正當の議論にあらず、柔腸溫和の良女子は徹頭徹尾此の如き唱道に附和する能はず、之れを擯斥するに毫も躊躇せざるべし。而して其之れを擯斥するは敢て其事に冷淡なるが爲にはあらず、此の觀念は實に道德上の感覺に矛盾するを以てなり、抑も戀慕の最も神聖に、最も純潔なるものは、必ずや夫婦有別の制を要すること、千古不易の天則たり、豈に他に之れを外にして求むべきの組織あらんや。

五

佛國に此の如き議論の起るは、蓋し偶然にあらず、反動の極端に失せるなり。獨逸は之に反し、中等社會よりは尙ほ良風を存し、夫婦は双方自由の撰擇を爲し得べく、唯稀れに或る種の壓制强迫あるのみ。加之許嫁の男女は隨意に交際し得て、互に其性質の異同如何を識るを得るよ難からざるなり。夫婦別わるの爲め、却て是れ不道德の組識なりと擯斥するは、一に其夫婦たる人の如何に關係し、決して此の夫婦其物の組織に其罪を歸すべからず。例へば玆に淸淨なる一器ありとし、不潔物を塡充したるか爲めに、之れを破毀したりとせば、是れ其器の罪にあらざるや明らけし。此に由て之れを觀れば、其罪誰に歸すべきや。夫婦の制は縱し上來論ぜし所の其弊害を除き得るとも、他の人世一般の組織と同じく、尙は種々の缺乏あるべく、此の缺乏の多きにも拘らず、飽くまで此の制を以て神聖と爲さゞる可からざるなり。女子の人よ嫁して夫婦となるは、是れ其身を奴婢に下すなりと言ふものあれども、此の論や夫婦を以て已が生活の道を得んと欲する、卑屈なる婦女子の事のみ。若し夫婦は已が女子たるの本分を盡すの地位なることを知り、一家の政治を執る爲め、百般の義務を盡すが爲めにせば、誰か婢妣を以て之れを目するを得ん。思はざる可からず。蓋し秩序ある家族の生活は、唯純潔なる幸福なる夫婦よりして成立すべし。社會は唯家族の柱石を以て鞏固なるを致し、國家は唯

家族の中心より出で、公事に生氣を附する女子の氣息を受けて自由の發達を遂ぐるものなり。

夫婦を此の根本の主義に復古せしめ、新たに其神聖を發揮せんこと、是れ實に現今に於ける女性の樞要の問題なり。否問題たらざるを得ざるの急務なり。而して此の急務は彼の形、即ち今日の女子が幾分の自由發達を得たる夫婦の形を圓滿の文明に進め、最良風俗の日光を以て之れを照徹するに在り。夫婦は我等が幸福の最上階として貴ぶべし然れども心に平和あるもの或は之れを欠くも妨げなし。世の各女子は宜しく此の一言を以て眞女子の智識の絶頂峯頭と思ふべきなり。如何となれば深く尊敬の意を盡して近づくべき彼の夫婦てふ神社の門へは、情火に驅られて走り入るべからず、一時の醉に乘じて蹣跚の歩を移すべからず、名譽心と高慢心の卑劣なる動機に促がされて、其閾に近づくべからず。男子が生活の爲めに如何なる撰擇を配偶上に行ふとも、毫も顧慮するに足らざるなり。女子は獨り女王たるの權力あり、愛と戀との國は實に女子の專制國なり、直隷地なり、意の如くこれを支配し得べし。斯く女子には至尊の權あり、最高の力あるが故に、此の權力の有名無實たらざらんこと、是れ女子の最も苦心を要する所なり。

（未完）

七



○育兒衞生法（承前）　醫學士　關場不二彥

乳兒は已に前陳する如く飲食と取ると屢なれば、兩便ともに亦た數々なるとは言を俟たず。一晝夜の間だ三回より五回糞便し、之より猶ほ數回尿を利す。是れ其健康を保持するには欠くべからざる事なり。

若し此の如くならざるときは母親又は保傅の義務として、灌腸を作すべし。灌腸には通常温煖なる湯或は蓖麻子粉を煎じて、極めて軟らかき溶液を用ゆなり。若し少しく腸胃を刺戟せんと欲せば砂糖、舍利別或は精製せる蜂密を灌腸水に加ふべし。但し一茶匙の砂糖なり蜂密なり、之を一合許の微温湯に混和するなり。渾べて石鹼或は鹽類の刺戟なす灌腸は小兒には害あり。

數回の糞便と利尿とは勿論小兒と不潔にするを以て、之を清潔にし之を洗拭するは

極めて必要なり。否らざれば股の内面は糜爛れ陰部臀部の邊は搔痒を起し同じく紅色に爛るゝこと稀ならず。小兒の糞尿は大人に於けるとは異なりて、殊に小兒の乳汁を吸ひ、一般に多く液体を攝取するに於ては腸の排泄物は柔軟にして黃金色を帶び、而して尿も亦透明にして臭氣乏し。後年に到り稍〻堅き食物を攝取して、始めて其排泄物も色、臭及び固形とに變化を來たすなり。尿も利せず糞も通ぜざるときは、母親は宜しく之を醫士に告げ其診を乞ふべし、倶に生命危險の者たり。

夫れ新生兒や救助を要すること夥多し。自ら爲すことを得ず、嗚乎それ母親の愛なくんば彼れ焉んぞ生育せんや。滋養ある食品あり、煖温足りて安靜なり、臥床淸潔にして柔軟なり、彼れ亦た何ぞ他に要せんや。彼れは頭も胴も擡げ得ず、運動といふは單に手足を動搖するに過ぎずして、未だ定まれる運動とはいふべからず。始めて五ヶ月の後に於て小兒は頭を擡げ得て、また坐することも得るなり。是等の事些細なれども、然れども之を知るの必要は一に慈母、もしくは乳母が決して期を誤まり、早く坐せしめず起たしめず、勉めて臥床上に臥せしめ、又れ臥せしめながら負ひ擔ふにあるなり。之に反して小兒自ら頭を擧げ起坐せんとすること頻りなるときは、母親はその柔かにして動もすれば倒れんとする身体を支へ持つべし。漸くにして小兒の筋肉發達し、体力勁强となると

九

きに當りては、母親は之を小兒の意思に任すべし。

然れども起たしめ坐せしむることを期早きに過ぎ起ち歩するに適當なる筋力未だ發育しおらざるに、之を强ゆるは注意すべきことなり。物の自然自らの筋力を充分に感得し來れば、小兒は他の强ゆるを俟たず、行歩を試むるなり。九ヶ月十ヶ月前に於て稚兒が歩を試むる頗る稀なる者なれば、母親の記憶を要するは勿論とす。起立せしむると早きに過ぎ、身体の發育をして妨害せしめ、殊に手足の畸形屈曲等を來すこと少なしとせず。況んや身体の骨骼未だ堅牢ならず、起立盡く平均を獲るに由なく、動もすれば倒れ傷づき、生命にも係はることなしともいふべからず。

先づ我邦の風習として生れて未だ月も經ざるに已に背負はしむると稀ならず。不注意よりも乳母或は「もり子」が唯義務的に背負ひ頭の「ぶら〳〵」するをも顧みず。また紐を以て身体を堅束し小兒の發達上頗る不利なるなり。

獨り背負ふときの不注意のみならず、「抱き上ぐる」事に於て尤も慈母の注心を希望するの事實なり。輕諾にも小兒が容貌をしかめ、或は泣き叫ぶとあれば直ちに安靜なる牀上より抱き上げ、ゆすりながら東西に徘徊し、或は外に庭園に出で勉めて其泣き叫を止めんとするなり、是れ實に一方より見れば親愛と懇切なる人情とより出でし者と雖

十

も過失なきに非ず。第一に輕諛の罪なき能はず。第二に小兒に習惡を與ふると是なり。

何をか輕諛といふや。夫の罪なき小兒が無益にも泣き叫ぶといふ理由なし。乃ち外面より來れる刺戟なきやを檢せざるべからず。徒らに泣き叫べば直ちに抱き上げて之を靜止するは輕諛なるなきを得ず。蝨の刺せるなきか「れしめ」の濕へるなきか衣裳の堅く「じめッし」あるなきか、或は寒さを覺へるなきか、若しまた熱きにはあらざるか、或は飢へたるなきか、或は睡らんとするに、四圍の喧しきなきか。万端の外障その泣き叫びの原因となれるあるべし。思ふに面容は身体の鏡なり。身体何れの處よか疼痛なきか、乃ち面容を「しかめ」などするとなきか、是れ尤も慈母の注心する處なるべき者とす。

何故に惡習を與ふるといふや。曰く母たるもの兒の狀態如何を問はず、直ちに抱上げ、ゆすり動かし小歌を唱へなどするを以て泣き叫びの療法となせば是れ遂に慣習となり、其晝と夜半とを問はず小兒は泣き叫びて、外に抱き上げられんとを願ふに到るなり。慈母も乳母も亦た抱き上ぐれば泣き叫びの靜止するを以て之を習慣となすべし。嗚呼是れ何如ぞ過れる惡弊ならずや。縱令ひ健全なる小兒と雖も夜半の寒さに、心よ

くい暖たまりたる臥床を離されて風に觸れ痛き處あるにもかゝはらずゆすられ動かされ却て其苦しみを増し小兒は實に病まざるを得す。感冒といひ腹痛といひ疾病を釀成すること多かるべし。

已に疾病あり。熱を帶び疼痛あり遂に泣き叫ぶ此時慈母なり愛婆なりに抱き上げられゆすられ動かされ熱益々高く氣色いよ〳〵惡しく疼痛みる〳〵勁く空しく此無辜なる愛兒を苦しましむるは豈に是れ抱き上ぐる惡習の結果ならずや。

初生兒は渾べて靜謐に臥すことを要す。蒲團なり臥床なり共に動かされて日光のあたるところ風通りのよき處に出さるゝは無上の幸福なり。然れども片手などにて抱き上げられ惡習を染めしめらるゝは無限の不幸なり。

何如して泣き叫びを靜止せんか宜しく前に陳せる原因に注意すべきなり。而して決して惡習を與ふるなく靜かに臥床に息ましめ單に頭を撫し除くべき原因は除くべき者とす。

又注意すべきは高きに抱き上ぐるとき及び歩行するとき(但し歩行し克ふ小兒に於て)是なり。片手などにて高きに抱き上げ或は小兒の片手を引きて高きに登り無理にもひく等皆な母親のよく心得べきことゝす。

文苑

○拔刀隊諸勇士の七回忌よその功績をおもひてよめる歌

福羽美静

ゆめの間に、なゝとせへたり、ますらをハ、

きえてもきえぬ名をばのこして。

○近詠五首

間島壽信

柳　くもりなき、池のかゞみの、糸やなぎ、いとのどかにも、はるかせぞふく。

蕨　ひともとぬ、みやまのおくの、はつわらび、折残されて、たけはてにけり。

雉　うちわたす、むかひのをかの、朝ぐもり、小雨となりて、きゞすなくなり。

歸鴈　うら〱と、かすむうらわを、見渡せば、おくれさきだち、歸るかりかな。

燕　あをやぎの、糸くりかへす、はるかぜに、みだれて遊ぶ、つばくらめかな。

十三

○くさ〳〵の歌

海邊雨　富田愛子

かさまつの、おたりにあめぞ、そゝぐなる、わだのみさきを指してきぬれば。

菫　中村

きゞす鳴く、やけ野のはらの、ゆふづき夜、つきもすみれの、はな咲きにけり。

荒庭菫　金子錠子

あれはてゝ、野となるやどの、にはなれど、はるはすみれの、はなぞ咲きける。

原菫　石渡忍子

ひばりなく、あさぢがはらを、きてみれば、ひとりすみれの、はなぞにほへる。

雨中蛙　伊藤琴子

をやみなく、さめそぼふる、いけみづに、つま呼ぶかはづ、こゑしきるなり。

池杜若　藤井靜子

わがやどの、いけのみぎはに、あさからぬ、いろを見せたる、かきつばたかな。

若鮎　金條直子

さくらがは、はなのさかりに折りはへて、わかゆつりつゝ、けふもくらしつ。

○静女怨　内田遠湖

强上舞場嬌態聳。恨深一曲鶴岡春。妾身願做芳山月。照看雪中分手人。

○跋木村長州天人眞野氏訣夫書　仝

語曰。見危致命。以長州之勇。豈待婦人之言乎。雖然情者人之所不免。而死生離合之際爲最。如項王於虞氏。木曾氏於松姫。（書中所言）雖英雄亦不能免。夫人謂。情私而義公。不宜以私害公。先自引決。以勵夫之義於必行。若眞野氏者。豈可不謂烈婦矣哉。此書友人某甫所寫以示余。感歎之餘。書其尾以還之。

○めのとの草紙ぬき穂

人の子などまゐりあそび候はんに、わが子のごとくおぼしめしあつかひ候へ。風ひかせ、どくなるものはしがるとて御くはせ候まじ。その御あたりへたち入りても、ひと〳〵かどわるやうに見えてこそ、御所からのめでたさもしられ候へ。相かまひて〳〵、あらるゝまゝよわが子ならすとて、あらざられましく候。さりとてまたしかり候へば、

おとなさへくるしう候、いはんやをさなき人(ひと)は、おぢ候べし。いやしきものとて御いやしめ候まじく候、ことにつらきことをよくしるものにて候。むかしさる御かたに、いま参(まゐ)りの女(によ)ばうのみぐるしげにてまし出(い)でたるが、御まへのひばちに御炭(すみ)をひばしにておかれ候を、御しうもはうばいも、御まへのすみは手(て)にておくものにて候、箸(はし)にてはおかぬものと申(まを)し候へども、ひばしにておきてたちのきて、御炭(すみ)あしく候ほどにと申して、そのまゝ御いとま申(まを)しける。この人はをさなくより修明門院(しゆめいもんゐん)(修明門院重子は贈左大臣藤原範季卿の女順徳院の妃なり)の御かたはらにさふらひける人(ひと)となんきこえし。げにも御まへのすみは、よくのごひてひきてあぶらをぬりておくなり。おうしなることとおはせられけるを申(まを)すなり。

御むすめそだて候も、十ばかりよりもなり候はゞ、おくふかく人(ひと)にみせられ候まじ。心(こゝろ)うらやかに、こゑひきく御そだて候へ。あらるゝまゝにくるはせ、ものいひしどけなく、はし近(ちか)にうちふしなどさせられまじく候。そうじてひとすくなきみちありくも、また大勢たちまじり候をりなど、御心(こゝろ)をそへて御みはなつまじく候。かやうの事(こと)、母(はゝ)おやのこゝろもちにあることなり。もし御ぐしなどすくなく、おんかつらにてつくろひたまふことありとても、よくよく御身(み)にそふやうにうつくしくしなさせたまへ。まことの

やとひもの〻やうに、かつらのふしめきたるは、はしきものなり。よおなどが御ひとりで御枕のあたりよれかれ候へ。たゞぬるもれくるも、身にこ〻ろのそひたるがよきにて候。よる不圖したることあるに、ひとのおどろかしまゐらせ候ことも、また我れとうちれどろき候とも、しづかに御目ぞ見あけて、心れしつめてれんれきわるべし。ふためき候へはありさまれそろしきものなり。



○報知異聞 浮城物語（小本一冊四百三十一頁定價七十錢 東京日本橋區藥研堀町報知社發行）

此の浮城物語を讀みて、先づ第一に起すべき一疑問あり。曰く、若し本書をして矢野龍溪氏の手よ成ると言はざらしむるも、乃ち名聲の藉甚せざる凡士の作よ係ると言はしむるも、矢張世間の當讃を受け名士の贊評を受くる、斯くの如くなるべきか、と。

十七

抑もジユールヴエルーヌは思軒居士の言はれたるが如く、一種常に異なる所の眼孔を有するには相違なけれども、又鷗外漁史の言はれたるが如く、幾巻の書樣に依ッて胡蘆を畫くものにして、近時の文學者の爲に大に卑めらるゝ者なり。然るに龍溪氏は何故に之を學ばれしぞ、之に摸倣せられしぞ。（鷗外漁史は如何に然らずと辨護せらるゝも夫れ小說は詩なり、一種の詩なり、然るにヴエルーヌの小說は悉く皆詩として價値なきものなり、隨つて此の浮城物語も詩として毫も見る可きに足らざるなり。且又其の行文は如何といふに、吾人は如何ありても蘇峰生の言はれたるが如く「神穩清秀」なるを見出だす能はざるなり、勿論其の果して苦心經營の中より鎔錬し來りしものなるやを知らざるなり。文章已に見るに足らず、然らば其の趣向は如何。精密に讀み仔細に見來れば其の瑕疵と覺しきもの多々あるを見る、決して中江篤介氏の擧げたる一箇條のみに止まらざるなり。

然りと雖も近時の文學愈々益々細となり、纖となり、善く云へば小なるもピヾリたる山椒の如く、惡く評すれば臭き生豆の如く、兎に角萎靡して振はざるに當り局面驚くべき程に濶大なる本著の如きは、實よ龍溪氏を措いて他に得べからざるなり。それ果樹の如きも培養足らざれば、其の結びし實は必らず小なり。文學に於いても然らざるは

なし。培養の足らさる文學者の手になりしものは、必らず細なり小なり。吾人是に於てか知る、浮城物語の尋常の尺度を以て側度すへからざるを。且つ其の文章趣向の、時として專門の文學者に舌を捲かしむる所あるは吾人の大ょ舌を捲く所なり。要するに本書は文學の正面より見るときは、餘りに價値あるものにあらざれども、裏面より見るときは、實に大價格を有するものなり。吾人は之を江湖に推薦するに躊躇せざるなり

○萬國娼妓沿革（小本一冊二百三十三頁價金四十五錢東京神田雉子町三十二番輿論社發行）

吾人之を或書に聞く、二人の植物學生あり、郊外を散歩しけるか、遂に一桃林に達せり。時正に春、蝶舞ひ蜂躍るの候、滿林の桃花爛熳として咲き亂れ、紅白相參差して美いふ可からず。兩生れ思はず林中に入り、氈の如き綠草に坐して眺め居たるが、唯一樹の毫も花を着けず、枝葉の萎靡せるを見出だしぬ。一生曰く、是れ肥料を與へず、培養を怠りしが爲なりと。一生曰く、否々萬木皆欣々の色あり、乃ち其の多くに肥料を與へて、獨り此の樹にのみ與へざるの理なし。是れは之れ蟲の爲ょ害せられたるものなりと。甲曰く、然らず、果して然らば脂の出て居る可き筈なるょ、之有らさるなり。乙曰く、蟲ハ中心

にあるなり、後必らず脂を外部に生じ來らん、論議未だ央ならざるに、偶々林主の廻り來れるあり、兩生の論議せるを聞き其の故を問ふ。兩生告ぐるに實を以てす。林主大に笑つて曰く、此の樹の花なきは培養なきの故にあらす、又蟲害を受けたるが爲にあらず、實に去月植ゑ換えたるものなればなりと。兩生聞きて呆然たるもの之を久しふす。

嗚呼、僅々たる一小樹木にして尚其の來歷を詳にせざれば、如何に論辨するも到底雲を捉ふるが如くなるを免れず。況んや世論を動す程の大事に於いてをや。然り政治なり、法律なり、經濟なり、宗敎なり、凡て社會上百般の事、之を論議せんとするには先づ其の歷史を研究するを要するなり。近時娼妓存廢の事、我が社會上の一大問題となり、社會改良を以て自ら任ずるの人士、皆思ひ／＼に說を立て、未だ其の歸する所を知らず。此の時に當りて此の萬國娼妓沿革の現はれ出でたる決して偶然にあらざる可し。本書は原名をHistory of Prostitution.といひ米國の醫學博士ウヰリヤム、ダブリユー、サンガー氏の著に係り我が土屋柳平氏の譯されたるものなり。全卷悉く淫賣の原因、變遷及び結果の如何を論究したるものにして、著者は純然たる存娼論者なれば、其の中自ら吾人の滿足しがたき箇所なきにしもあらざれども、其は第二の話にして、本書の有益なるは實に其の歷史的に研究したるに在り。故に存娼論者に好材を與ふるは、勿論なれども又

廢娼論者にも良資を與ふる事疑ふべからず。譯文また平易にして解しがたき箇所なし。世の娼妓の存廢に就きて議論せんとするものは、必らず本書を一讀せざるべからず。

○日本文學全書第一編（東京博文館藏版 正價金二十五錢）

萩野由之、落合直文、小中村義象三君が校訂せられたる此書第一編は、博文館より發兌せり。未だ月へぬ間に、世上の高評を博し、再版するとゝなりぬ。毎篇の首には、解題加へられたるは、實に善し。然れとも徒然草の兼好が艶書に付て意見を述べられたるは敬服し兼ぬるなり。之を論せんと思ひしに、日本評論第五號は早くも之を言ひ爭へり。讀む人是非を判じ玉ふべし。群書一覽には住吉物語、紫式部日記、竹取伊勢の解題詳らかなり。文學を調ぶる人は、よろしく參看すべきなり。頭注も亦いと親切なり、實に文學の良師なり。今此書は、我邦の文學を總集せんとする者にして、此總集的の者はまた貴重すべきは論を俟たざるとなり。嘗て西山公は扶桑拾葉集を編し、古今の和文三百十三編を載せたり。我邦の文學は、實に此編に籠も

りしなり、然れとも、其小品なるを如何せむ。此書十二編將さに二十三部の日記物語類、乃ち日本古文學の大作を蒐集せんとす。吾人は之を我邦文學の爲めに賀す。思ふに我邦文は益〻これよりて喚起せらるべし、吾人は之を信じて已まざるなり。

○閨秀新誌（本郷春木町一丁目十九番地閨秀社 第一號五月十五日發兌）

女子敎育尤も切なるの今日に於て、女學上の雜誌廢刊となるは、悲しむべし、然れどもその新生するは祝すべし。久松定弘、森林太郎、石橋友吉、石橋助三郎、大橋素六郎等の諸氏相謀り、閨秀新誌を發兌せられぬ、許多れ祝辭、社說論說、文苑、小說、雜錄、雜報一として賞讃の外なし。其女敎論の如きは、同意と表えて止まざるなり。我が社も亦た此良友と得たるを喜ぶ。

或人いふ廣告に五本の酒罎あり、又酒不可飮の廣告もあり。閨秀新誌の優美には、またその第一號には、少しく何如。その源氏物語の雅致ある標紙に對しても顏色なしと然れども是れ强ひて咎むべからずと思へど、致しかたなし。

○女學生第一號（女學雜誌社 五月廿一日出版）

處々女學校の生徒が寄草したる文章を、主として掲載しあり、又評言もあり、女學生の穎才新誌といふべきなり。巖本善治君が發行れ主意書あり。

巻首に花蹊女史が題詞あり、曰く、

彤管吐來錦繡腸。或如二魏紫一或姚黄。東方自有二名花在一。不レ使薔薇占二國香一。

と牡丹の國色薔薇の比に非ず、東洋の文華粲爛としてあり、西文をして跋扈せしめずとの意ならむ。然らば何が故に此雜誌よ横文を狹みたる。(三ヶ條)之と書きたる人も甚だ不名譽なるべし、これまた深くいふべきとならぬか。



○豐臣秀吉の妻淺野氏　　　鈍廼風流士寡述

藁の席、處々破れたり、瓦の盃、一二緣缺けたり。燈火微にして屏風のまた風を蔽ふなし。媒妁盃を執て、新夫婦の婚を結ぶ、之を織田信長の卒、木下藤吉郎が尾張の人、又左衛

門が女と、合巹の大禮を擧ぐる時の狀況となすなり。

藤吉郎後ち秀吉と稱し、性を豐臣と更め、功成り身貴きに及むで、淺野氏を稱して、北廳といふ。秀吉嬖する所ありといへとも、皆な之を別處に置き、獨り淺野氏と居を同うし、內事その裨益するところ多し。每ねに秀吉を戒しめて曰く、

願はくは藁席瓦缸の時を忘るゝことなかれ。

秀吉の軍に在るや、秀吉時に書を淺野氏に贈り、勝敗を報じ、軍略上の事より家政家事に到る迄注意せり。(史徵墨寶に據る)。北廳(北ノ政所)元と杉原氏、出でゝ淺野又左衛門(一に彌兵衛に作る)正しきに似たり)の養女となり、おねゝの方と稱す、後ちに吉子と名つけ慶長三年八月秀吉薨じて、髮を削り、四年大坂より京師に移り、十一年高臺寺を東山に建て、此に居り、名を高臺院と稱し、寬永元年九月六日卒す。

淺野氏は秀吉の正配なり、大業を助け成し、秀賴を視ると所生の如く、淀君以下婢妾の類を遇するにも間言あること、なく、秀吉薨してのち、終始禮を關東に失はずして令終を得たり。非常の賢婦人と稱すべし。(史徵墨寶考證)、

淺野氏容貌端麗なり、初め前田利家之を聘せんとし、媒妁をして意を又左衛門に通せしむ。利家弱冠、犬千代と稱し、門閥に生る。又左衛門大に喜び、之を女に告く、女肯んぜず、

犬千代百方之を求む。時に秀吉、木下藤吉郎と稱し、織田氏の卒となりて、又左衞門の連房に居る。又左衞門その才幹あり、且ッ犬千代と善きを以て之を謀る。藤吉郎往て犬千代に說き、遂に其婚を寢めしむ。犬千代乃ち藤吉郎に逼り、婚をむすばしめむとす。藤吉郎醜にして、面猿に類す。又左衞門その情を以て、女に語つて曰く。

汝お藤吉郎に嫁すべし。然らずば事安からず。且つ藤吉郎、今は卑賤れ身なれども久しく人の下風に立つ者にあらず。

と女輙ち之を肯ず。合歡の夕敗席と缺盃とのみ。犬千代以爲らく。是れ我の故を以て假りに合卺をなすのみ、久しからずして必ず離婚すべし。離婚せば、我れ又之を窘めむと、日ょ之を覘ふに、夫妻愛敬し、意殊に相中る、犬千代終ょ愧謝す。

豐臣太閤は蓋世の英雄なり。淺野又左衞門已に其才幹を知る、復た松下嘉兵ょ讓らざるなり。而して其女の慧眼、敢て門閥に徃かずして、卑賤の一卒ょ嫁す、また彼の慧眼紅緋の比に非ざるなり。嗚呼、金屋玉堂、銀燭煌々の中、或は鸞鳳を繡する六曲屛風春煖を籠むるの裡、門業の公子、爲すなきの人と婚を願ふの人なきょ非ず。寧ろ敗席缺盃倆の英雄と結納するの快に若かざるなり、又噫。

○胡桃の殼

○積善の家に餘慶あり積惡の家に餘殃あり。佛氏いふ因果應報と西哲も亦いふ因果ば猶は形影の如し小不善なりとも其影必ず殃を含む夫の一髮の細きだも猶はその影あり。と又いふ善事を行ふは容易なるに似て難し夫れ胡桃を噛むが如きか。その殼や堅し然れども無限の賦味を藏してあり之を味はんには其殼を噛み破らねばならず。と思ふに事業一として胡桃の殼ならさるはなし。(Den Nuss zu knacken.)

○外よりして見らるべき金創は必ずしも深しとはいふべからず。美人よりして慰め得らるべき悲痛は必ず是を大いなるものにはあらじ。(約安保爾)

○汝生れたりしとき汝は呱々として啼きき汝の親姻は欣々如として悦べり然れども汝の死せんとするときさ汝獨り之を悦ぶとするも願はくは知人をして潜然涙を垂れて泣かしめよ是れ今ま汝が世に立つの座右銘なり。(過去、未來、現在)

○喜びを分かてば一層に喜びとなり悲みを分てば半分の悲みとなる。嗚呼この喜との悲とも之を良友に語りともに之を愛婦に語るべし。嗚呼砂礫を鎔かすの炎天に名寺に巡禮し路遠くして苦み深し。このとき綠茂れる森木立の我を呼ぶあり。行て之に赴けば樹下泉流の噴き出るあり喜ひ一層々々。嗚呼人間得意失意のとき語るの

人なくむば何如ならむ。

（未完）

○女子敎育意見群載

一、英都龍動ほど女學校に富めるものなし。城郭の北或は西北の幽靜なる市街には女學校の標を見さるなし。其敎ふる所を見れば先づ綴字、讀方、習字、暗算、算術、文法、歴史、地理よりして羅甸語學、代數、幾何、修辭、美術文學、古今史學、古今地理學、年代紀、鑛物地質學、生理學等にして撰科としては佛獨語學、繪畫等となす。思ふに、英國女子敎育の大誤謬となそは、一に男兒の敎育と其科を異にせさると是なり。敎育家は英國には乏しからぬなり、然れども、何の故に然るか、之を疑ふに堪えさるなり。

夫れ童兒は大人となり、女兒は家婦となる、彼は家を成し、家を整へ、之を護り、之を保ち、力を事業に施こして、休ます、其事業を改良して已ます、之を擴張して怠らさるなり。然とも彼れ飽くまでも家婦が勉むる内政に服從せさるべからず、彼は意を枉げても規律ある家事經濟家の妻に誘導せられねばならず。其情致によりて幸福なる一家の團欒たるを形成せねばならず。家婦の負擔は實に彼れ主人の負擔に異なれり。業を分ちて支配處理し、以て此の美なる生活を造るなり。此理由よりして女兒が受くる敎育は、如

何しても男子が授けらるゝ訓導と異ならさるを得ず。小學々齢に於て、普通の教育を倶に相同じく受くるは善し。然れども已に普通汎論の教育を受け了はりてよりは、男女其途を異にせさるべからさるは掌上の明瞭なる理由なり。然るを幾何、代數、金石、地質、史學、年代紀等、の女兒乃ち後年の家婦には、不必要なる學科、至難なる藝術を以て、其課程となすや。頗る怪しむへきは事實なり。英國女兒の教育其高等なるやは知らずと雖も、我邦に於て之に摸倣して施行せんとするは抑も是れ何如の理歟。

二、妻となり母となるは、女子此世に生れての責任なり。妻となって而してのち、盡くすべき義務何如。夫に對し、世人に對するの任何如。母となっては兒女を養育し教育せさるへからず。以て全体よりして、一家の内政を、會計に、衣服に、庖厨に、調度に、父親に親戚に管理彌縫し行き、或は妊娠養生等は注意も覺悟せさるべからず。此等の事は處女の時代に於て豫め學び得、識り得、習ひ置かさるを得さるを。不必要なる代數、幾何、動植、鑛石等の至難にて忘却し易きより、汲々乎たるは愚なり、拙なりと吐露するの已むを得さるを信ずるなり。

三、女子の身体搆造は、男子の如くならず、また十五六歳の比よりして、女子の、身体は主として、生殖機能上の一部に發達する者なり。是れ生理學上なかるへからさるの變

化にして、是よりして男女各岐路を分て進むの一期程なり。此時に當り、至難なる學科を以て訶責するは地下の獄吏に異ならす。嗚呼愛すへき處子は、何爲れぞ此運命に際會したる。况んやまた一日六七時の時間の課目あり。當今の處女は果して之を學ぶ急ならさるへからさるか、又多からさるべからざるの後日家婦となるの秋、之を應用せしむる、盡くせんとするか。夫れ至難の學科と、過多の時間とは、後來家婦となつて、頗る大切なる機能を萎縮せしむるなり。其發達と妨害するなり。其纎弱なる身体を幽鬼ならしむるなり。雄壯活潑なる男兒を生むを停止するなり。一國の元氣を陸沈せしむるなり。今や處女近視眼多く神經衰弱症を患ひ、醫家を苦しましむる者少なしとせす是れ誰れの罪過なるや。

四、上流に位せる縉紳の門に生れたる女子の教育に措て局外となし、教育の適當なるを希望するは、一に中等社會と、人民の上流に立てる者の女子に在り、而して又當局者が注意すへきは、此等婦女子が教育年齡を去ッて、一家の婦人となりて、その應用すべきは何如なる者か、甲か乙か丙といふに在り。即ち算術に在ては、普通にて事足るべく、料理法も在來我邦の料理と、一二の保健食料に理方にて事足るべく、醬油砂糖鹽梅の適宜、魚鳥の肉の良惡を辨別するの稽古等にて、充分なるべく、故に生理養生の梗概位は學び

置くべく、また裁縫なり、育兒法なり、賓客接待法、女禮の一端心得れくへく、其他德義上のと倫理上の注意まて、家婦慈母の職務充分なりと信ずるなり。纖々たる女子また政治に關渉し、物議に繫累するに及ばす。微弱なる腕力、自ら金錢を儲け得んとするに及ばす、專門の職業を以て、一個人の資格を博し、社會の波瀾に當るまも及ばざるへし。宜しく家主が外界に於て、把握したる金圓を、自ら管理し、出納を慮り、單に節。儉。の二字を以て、其奥義となすへし、節儉實に是れ内政の秘訣なり。夫れ是れ之を識らば、何ぞ史學、地理、動植物學、鑛物、地質、幾何、化學、理學等の學問を要せんや。また之が爲めよ許多の時間と精神と資金とを用ゐんや。また之が爲めに求めて身体の力を耗銷するを望まんや。之を當局者に求めて急なり。

（未完）

○白粉の中毒

白粉の中毒といふは、其中に含める鉛霜によりて來る所の者なり。令孃諸子は、嵐みんし及び中村福助が之に罹り、嘗てまた我童延若等が之に由て泉容となりしとをも、記臆せらるへし。

其中毒の症といふは、時日長く經て起るものよして、先づ全身の「やしなひ」わるくなり

消化する機器は害せられ、次第〳〵に体は羸れ瘦せ、皮膚の色あしくなり、下腹は絞るごとき痛みを發し、漸々に舟底の如く「へこみ」、大便は「とまり」、筋も關節も「いたみ」手は「ふるへ」又は不隨となり、足もきかず。數々「ひきつけ」などして、体力減じ遂に倒るゝなり。

此中毒は、俳優に多く、殊に女形に多く見るなり、次の幕あきの時に、前回にぬりし上に再三「ぬりてみ」、終日ぬぐひ洗はず。これその原因なりときく。

藝娼妓等にも多くあるなるべし、唯々輕き症のみにて重きはなく、また都街の女子にもなきとは無かるべし。學者の試驗によれば、新駒屋福助か用ゆる白粉は、東京下村製の此花白粉にして、「みんし」は常に唐の土を使用せり、皆な鉛霜を含むものなり。尤も多く鉛を含むは、夕顔ゑりおしろい、之に次て「ぱッちり」なり、盡く鉛霜なりといふとも誣言ならじ。之に次て雪の艶と稱し、是れ令孃等の間に行はるゝものなりと聞く。白菊、雪の曙之に次ぎ、月の花、夕顔おしろいなどは、餘り毒なき者なり。

鉛霜を含まぬは、西洋白粉なり(米の粉に香水を和したるもの)。記して聊か令孃が香奩中の參考に供せしめんとす。

○哲學者の女房

庭園に立ち出で、朝露のまだ乾きもやらぬ花を手折りて、獨り言、

「この美麗なる花。アヽ自然の美。これをも愛づる心なく。絶ゆる間も見せず何をか書き玉ふある。イザ之を挿みて、とりちらしたる書函の上に、置きなば。夫君は少しくは美麗なりと、感じ玉ふべし、

と、花の咲き匂へるを、我が夫の書齋なる書函の上に、銅瓶据へて挿み置きける女房の心を。無殘にも見顧りもせで。

心と物とは、全く分離しあるものにして、連絡とてあるべき理なし。身は是れ物なり、我が靈魂は、決して之と連繫すべき理由のあるべからず。「デカルト」の云ふ如く云々、

妻は拔足して、夫の背後より、夫が書きたる筆の蹟を見れども、理解し得ず。玄妙の理學、何事にやあらむと、尋ぬる心も出でず、唯竊かに手拭もて面を蔽ひ涙を拭ひて。

我も此家よ來てより、三ヶ月には少し足らねど。もと〳〵善き人物なりと思ひ居りしに。人のまた「パルク」郎は中々の秀才よと賞めはやすを聽けば嫁しづく氣にもなりしなり。されど心も情もなき石か鐵かの讀書家とは知らざりき。朝は未だ暗きよ閨を立ち去りて。書齋に燈火もして書よみ。はや倦もやし玉ひけめと、傍へより茶を煎じ出せば、「五月蠅し、とく去りね」と怒を含み。「厨の用もあるべきに」、とて睨めま

わし。倶に手を携へて、向ふの森に逍遥せんといふ氣色もなく、朝な夕なの不機嫌顔、ア丶我れ程不幸なる者はなし、隣りなるマリアどのは、運よくも、ハイデルベルヒの大學を卒業なしたる人の許に、よめいりし、今は愛らしき女兒の母とはなりぬ。ア丶われほど不幸なる者はなし。折角手折りし花なれど、夫は見る氣さらになし。よし窓より打棄て丶

と涙ながらに、銅瓶とりあげ、庭の石めがけに打ち投げたり。夫は少しく笑を含み。

スピノザの女房はそれ位でよし、茶でも汲みて……

と一言の温たかさ、嗚呼是れ一星火活塞灰中なるべし。

○流行性感冒に就て

前月始めより、芝、小石川、本郷等にて、流行せる一種の感冒は、一時盛に感染を極め、稍々其勢薄らぎたれど、猶ほこの氣候の不順につれて、消滅する氣色は更になし。

此の病氣にか丶りし、四五日ふせば平癒なせど、咳嗽などはやまず出で、疲倦も甚だしく業をとりかぬる程なり。姙婦などは流産するとあり。元來熱病なれば輕しくなすべからず。醫士に相談すると肝要なり。

別して學校の如き、人の多勢集まれる處には、感染するもの多し。　兒女もちたる親々は成るたけ此流行中は學校にやらぬ方よかるべし。
豫防法とて、かたく守るべきはなけれども、夜露にあたらず、暴飲暴食なさず、雨中に濕ふとなく、また養生して、運動を活潑になすべし。
病にかゝり無理なるとせば、氣管の病を起し、または肺癆を引きれてすとあれば、よくよく注意すへきことぞかし。

○雜記畧抄の一段　　寸草隱士寄稿

明君賢臣の言行を擧けていましめとす。

尊とき君の仰よ、人皇二十九代　宣化天皇の勅に、食は天下の本也、黄金百貫目ありても飢を養はず、白玉千箱有とも何ぞよく飢を救はんやとて、大臣に命じて國々に御藏をたて、粮米を積蓄へさせ、不慮の事有とも、人民の命を救ふへきとの御事也とぞと。又戰國の頃、小田原邊を過させ給ひしに、百姓どもつゝれを着、繩の帶をしめたりしに、あれ見よ、凶年打つゝき皆難儀すると見ゑたり、吾早く來らはかくはせさせまじきよとて、御馬上にて御涙をながしたまひければ、人々承はり傳へ、感せぬものはなかりしとぞ。げに

や一滴の御涙、四海をうるほしたまふにぞあるへき。徳の流行置郵して、命を傳ふよりすみやかなりとは、此御事をや申すへき。又夏中は麥飯を召上られしに、近侍の人白米のいひを碗の底に入、うへに計麥を置しかば、汝等予が心をしらず、今戰國にして士卒寢食をやすんぜず、予獨り何ぞ飽食するに忍びんやと、仰せられけるとぞ。

いづれの君にや凶荒の後に、御位を繼がせ給ひしに、國用不足せしかば、深く憂ひ給ひ、扶持方の事、御机の上に常々張付させ給ひしとぞ。其外の御美政の數多き推して知るへき事になむ。

某の侯常に桑の葉のいひを用ひられしとぞ、萬に儉を用ひられし事推してしるべし。又死に臨みていはれしは、吾一生吝嗇きやうよもあらんづれども、凶年にも領分の民ども餓死をばさせざりしが、今はやみはれて心もとゝかす云々。この侯天明卯辰兩年民餓になやみしかば、あまねく物を分ちたびてすくはせらる。數左に注す。

米五百二十石、籾五万八千百九十石餘、粟二千百三十石餘、大麥四石二斗、蕎麥四十二石餘、銀二十貫餘、錢一万四百九十三貫餘。斯てもかねて田畑抔も持さりける者は、猶さまよひければ、國府の侍白川の邊りに假屋をしつらひてすゑれき、下司とつけて粥を煮させ、朝夕くばり與へ、若し病者あれは醫師をして藥とあたへし

む。すへて此料は右の員數の外なりし。寶暦八年の比より租税の内程々に隨ひ、籾なから貢せて凶荒の備へとし給へり。されども一所に貯へおきては、俄の事あらん時便なからん事を計りて、そこ〳〵に倉をたてゝをさめおかせける。其數九十七となん。上にいざなはるゝ下なれば百姓どもおのが物のうちを思ひ〳〵にさゝげて、此倉に收おく云々。天明の比天下凶荒なりしにも、此國の民は一人も餓死するものなかりけるこそ有がたけれ。さても此籾を貯ふやうこそたやすからね、あしく取計へば却て民の煩ひとなり、又虫ばみなどしていたづらになりゆく、かやうの事まで細なる掟あり。

某の侯飢民のために救ひ米出されしに、役人の取計ひにて貧民はかへす時なければとて、身上よきものへばかりかしたり。されば餓莩多かりしかば、領主其姦狀を聞かれて、それは手廻しなり救ひにあらずとて倉をひらき、自身下知して配分せられしとぞ。古人飢を救ふの術は賢臣を選ぶを先とすといへるは是が爲なるべし。

某侯曰く、一世の綱紀紊れざる時は、饑饉といへども飢ゆる民なく、後世饑饉ならずといへども、貧民多きは驕る役人の下に有故也と。

雲野下人

○餘興

○日本略史

阿母さん何所へ行くノ。「市中へ買物に行くのサ、お前おとなしく留守しておいで、お土産を持ッて來るから、他所へ遠く遊びに出かけては承知しませんよ、お母さん今直く歸ッて來るから。「そんなら子、お母さん、今度學校て使ひますから子、日本略史買ッて來て頂戴な。「そんな物どうするんだ子、無役。「それだッて今度から使うから、買ッて持ッて來と、學校の先生が云ふたから。「今の學校がそんな物を使うのか子、仕方ないよしよし。「お母さん頼んだよ、忘れちやいやサ。「よしわかッたよ、忘れないよ、おとなしくしておいで。と何も習はぬ田舎育のお袋が市中へといそぎ行き、夕暮近き頃ほいに我家に歸りければ、新らしき本を繙くは子供の自慢、待ち設けたる所へ母が歸宅のかけ聲、子供の喜び顔に溢れ。「お母さん忘れずに買ッて來たノ。「よくおとなしくしてをッたナ、感心だ子それよ、さ渡せしは杓子二本、子供ハ吃驚し。「こんな物どうするノお母さん、たまに氣が利くさこんな物買ッて來て、これをどうするノ無益。「この子が何をいふんだろう、これがお前の注文の品だア子。「わたしこんな物注文せないワ、日本略史といふたよ。「それよ、これが其注文の二本杓子だア子。

○音樂器械

オイ此所にあるは何品だ子。「それ知らないか。「お前知ッてゐるか。「知ッてゐるかノ知らないかノと宜い加減に人を馬鹿にするナア、一体元來それはそれよ、それだからそれを乍憚知ちないや、知らぬが佛だ、有難いだらう、押め。「矢張知らないだらう、知らないなら知らないと初めから云へば宜いじやないか、何にもそんなに威張なくッても宜からう。「それはさうとこれは抑なんだろう「是れ蓋し奚んぞ此側に書いてあるが判然とわからないや。「わからないとは嘘り、實は讀めないんだらう。「考へるとそんなものか。「考へなくともさう

だよ己れにも讀めないから面白や。「お互に讀めおくッては、面白くも可笑しくもないじやないか、何んだか一ッ聞いてみやう。「よからう。「もうし〳〵。「ヘイ〳〵、入ッしやい何御用ですか。「何にも買うんじやありませんが、此所にある品がなんですか子。「これですかこれは紙腔琴と申して、かうして鳴らすのです、好い音てしやう。「成程そうですか、それならきかいでも譯ッてゐます。「お洒落ですか、甚だメユセックな洒落ですな。「左様なら忌々しい小僧だ。

○古道具屋

咸多子

チイ〳〵道具屋種々な物があるなア。「ヘイ何で御座います。「ハヽア妙な看板を掛けたナ、八笑掛直なをし、フェン是は面白い。「此八代の鉢は何ぼじや。「ヘイ八鉢六十四錢。「此古備前の置物は。「獅子十六錢。「成程妙だ此本は。「ヘイ是は唐詩選で十四五錢位でありましたらう。「フム其本ばかりは直段が判然せんな、貴様は主人の癖にわからんとはどういふもんじや。「ヘイ私は主人だからわからんので其本の始めに何とあります、主人不相識とあるではありませんか。

○上手な聞人

昨日子越路を聞きヽに行きましたよ。「サーですか、何をやりました。「大閤記十段目を。「ヘイそれや面白かッたでしよう、如何いふ工合でした。「如何いふ工合ッて、如斯工合でリガアチタッツシチナリトチキコイダメセルクテモガゼカ「何んだか少しもわからない、餘程變てこだナア、少し逆上ましたチ。「串戲いふナ、今のがわからないとは野暮な男だ、ソレは僕が先刻順々に耳に入れたのだから、出すときには逆になるは至當だらう。「アハヽヽヽかついだ子。「太鼓はかつぎも背負もするだらう。



奉祝
皇后陛下御誕辰
明治二十三年五月二十八日
生文社員一同謹

○上流の清まんことを望む

上流の清まざるを咎めずして、何故に下流の濁るを咎むるか。 上の好む所下之より甚しきあるは、天下古今皆然らざるはなし。 讀賣新聞は昨月廿四日の紙上に於て「美人地を拂ふ鴨川の邊」と題して記述せる所ありたり、吾人其の果して信なるや否やは、素より知る所にあらざれども餘に甚しきとなれば、爰に之を轉載して讀者諸子の一考を煩はすべし。 曰く、京坂の舞妓が東京へ押出し、都踊りを持込めりとの事に就き、聞き合せたる處によれば、右は其の實舞妓藝妓なんど〻稱すべきものにあらず、素人娘なりといふ。 しかし京都の舞妓及び藝妓が、東京に來りたりといふは事實にて、これ東京隊攻擊、都踊り輸入なんど〻いふ青天白日的の上京にあらず、全く過日 行幸の砌り、貴顯方の内にて特更艶名に富ませ玉ふ伯爵子爵の方々が、密に内訓を傳へさせたまへたるため上京したるものにて、夫れか爲め一粒撰の上等種は、悉く東京へ出づることゝなり、今は名に負ふ祇園の近邊、鴨川の邊りも美人地を拂ひたる姿となりたりと、西京なる社友の許より報じ越しぬ。云々。 吾人は之を讀んで如何にも不快を感ずるなり。嗚呼上流果して斯くの如しとすれば、未だ一概に青年書世の不道德、女學生の不

品行をのみ痛論すへきにあらざるなり。

○日本授産館の祝宴

野上三省氏の設立に係り神田區末廣町十番地の同館にては創立三周年の祝意を表する爲め先頃より傳授謝金特別割引の事を始しに傳習申込人頓に増加し非常の盛況を致したるに付數日前其祝宴を湯嶋天神社内魚十樓に於て開きたる由當日は館主野上氏の演說及び館友並に顧問員等の祝詞あり同所の紅裙數十名盃盤の間に周旋して頗る盛んなりといふ

○パノラマ

内國博覽會一たひ開けて、天下の士女雲の如く霞の如く東京に集るを附込みてか、新奇なる觀せ物など頻々として開設ある様なり。 パノラマの如き實に其の一なり。 上野公園に開ける幢畫は、明治元年奥州白川の戰爭の圖にして、實地戰場に臨まれたる將士の考案撿閲を經たるものなりといふ。 さもあるべし一度此に入場し、之を觀るときは、身忽ち硝烟彈雨の間にある心地するなり。 淺草公園のパノラマは又一層にて、其の館建築は工學士新家孝正氏の監督に成り、まことに立派にして便利に出來居れり。 且つ陳列の畫は米國南北戰爭の圖にして、武器などの如きは、悉く當時戰爭に用ひたる實物にして、殊に觀客の頭上にある天幕の如きも、有名なる彼のグランド將軍が、南北戰爭の際に用ひたるものなりといふ。 加ふるに光線反射の工合陳列の工合等悉く巧を極め妙を盡せるより、如何なる眼にて如何に觀るも、到底其の畫なるを覺ゆる能はざるなり。 遠地の人にして上京したる諸子はいふまでもなし、在京の者と雖も早く之と一覽して、其の巧妙を知り玉ふへし、談話の種を得賜まふへし、且又美術や理學の發達に注意したふへし。

○外國婦人の慈善

築地米國基督敎會の外國婦人數名申合せ、貧民救助會社なる者を設け、過日來 米價騰貴の爲め困難する貧家に就き、實見の上それ〳〵切符を渡したりしが、愈々昨月二十三日より白米三合(一人前)づゝを引換に施與されたり。 其の施與の場所は京橋區新榮町二丁目の米屋にして其の初日に救助を受けたる

ものは百餘人なりしといふ。之を見ても、

○我が貴婦人は起つ能はざるか

外國婦人已に前述の如くなるに、嗚呼我が貴婦人は起つ能はざるか。　卿等は眠りたるか、死したるか、卿等は憐むべき貧民の状態を見ざるか、悲しむべき貧民の泣き聲を聞かざるか、ヨモ毎日、新聞紙を讀まざるよもあらざるべし。　卿等は實よ日本評論に於いて次ぎの如くに歌はれ居るぞ。

貴婦人行　　戸川安宅

一　禍なるかな、禍なるかな。
紅葉踏みわけ、往く人は、身に綾錦、粧へども、
鹿の鳴音に、夫戀ひし、淑女もあらず、貴女もなし。

二　禍なるかな、禍なるかな。
國の行衛も、しらぬひの、光まばゆき、唐衣、
たゞ空蟬の、裳ぬけがら、あな面白の、ひと〴〵や。

三　禍なるかな、禍なるかな。
口に慈善と、あげつらふ、會にしあれど、見渡せば、
家のすじめに、夫の光、坐ならびたり、伯子男。

四　禍なるかな、禍なるかな。
千島のはてより、沖繩よ、澤なるものは、佞人、
ゑのりの爲の、術なれば、鬼ともならん、佛とも。

五　禍なるかな、禍なるかな。
身は三界に、家もなし、男の爲よ、あさましや、
あやつられたり、敷島の、大和の國の、女子らは。

六　禍なるかな、禍なるかな。
都大路は、たへまなく、清けき水をば、そゝげども、
日月の光も、ほのぐらし、浮薄の烟、僞善の塵。

嗚呼斯く歌はるゝも卿等は心地あしからざるか。浮薄とは何如なる意味ぞ、卿等は知らざるか、僞善とは何如なる意義ぞ、卿等は解するを得さるか。　起てよ我が敷島の大和貴婦人！

○横濱婦人慈善會

吾人は前項を記し了りて喜ばしき報道に接したり、横濱婦人慈善會の設立乃ち是れなり。　同會は細

民の困難なるを救濟する目的にて組織せしものにして、昨月二十四日午後七時より相生町の嘉以古樓に於いて開會せり。　會する者凡三百名にして、會長稻垣すゞ子および安藤太郎氏其の他二三の演說等ありて同十時頃散會せり。　入會する者施與金を出だす者等、極めて多かりしといふ。　嗚呼横濱婦人慈善會は其端緒を開けり、貴婦人慈善會は如何、貴婦人慈善會は如何。

○姫御前倶樂部演說會

今日の蕾、將來の華、否後日の植木屋職なりと名乘られたる女子青年倶樂部の姫御前方には、過日の賠償をして一昨日定席上廣亭に於て、演說を開かれぬ。例刻には聽衆早や場に充ち、滿員締切と申す札掲しも、熱心なる傍聽の面々は大枚三錢といへる下足賃を景氣能く投りつゝ二階に上りけり。　頓て聽衆四五百名柘榴の如くに詰め込み、少しも身動きだにならさる頃、青井辨姫は演壇に現はれ、一題を演じ了りて、討論會に移らんとせしに、聽衆大に不滿を唱へ三錢の下足賃に對しても相濟まず、と非常に激昂し騷ぎ立ち終に警官の出張まで、仰ぐことゝなりしに、聽衆は出張の警官を取卷き、詰所に押掛りしに、詰所は多勢の人を支へ得ざりけん、凄しき音して、頭顚倒とぞ床落ちたり。　天津乙女のそれならで、眼を圓にし肩を張りたる久米的の仙人十數名、下階遙かに地響きして墮落したる事なれば、素破事こそ起りぬ、と四方八方天地より現場に押かくるさまなか〳〵に仰山なれとも、警部は汗水流して之を制し、更に近づくことを許さず。　唯遠くより抱腰箝口の壯士と、開口搔頭の辨姫とを見るのみ。　後にて聞けば數名の負傷者もありたるよし、危ふし〳〵。　とは東京日々新聞(五月二十七日)に記載せる所なり。　姫御前達よ卿等は何故に斯く何時も聽衆に嘲罵せられ、防害せらるゝも、演說は止むる能はさるか、卿等は何故に斯く何時も新聞記者に冷笑半分に記載せらるゝも、

討論ハ止むる能はさるか。 卿等の舌は實に動かではまさるか、立派なる舌よ、恐ろしき舌よ。

○女子高等師範學校の注意

女子高等師範學校は、左の文章を印刷して其の生徒に頒ちたるが、吾人は一讀して其の注意の行屆けるに感服するなり。

學校及幼稚園は多人數の集まる所なれば、時として惡疫傳染の媒をなす事あるは、勢の免かれ難き所に候。 當校に於ては是迄此忌しき災厄に遇ひたる事なきは實に大幸に候。 此頃府下に於て感冒症流行の摸樣あり、加ふるに追々暑氣に向ひ惡疫流行の時候に際したれは、當校に於て今一層病毒豫防の方法を研究し、惡疫傳染の媒介所たらさる樣、注意すべきは勿論なれとも、父兄の方々に於ても、當校の苦慮する所を洞察せられ、左記の要項に御注意あらんことを企望の至りに候。

一、家族に傳染病者あるときは之を當校に屆け出づる事。

茲に傳染病毒と稱するは、痘瘡、腸窒扶斯、虎列剌、赤痢、發疹窒扶斯、ヂフテリヤの六病を云ふ。

二、欠席屆を出すときは左の項目に準じ記入すること。

一 傳染病に依り（醫師ノ診斷アルモノハ病名ヲ記入スルコト以下之ニ倣フ）

二 眼病に依り　三 外傷に依り

四 熱病に依り　五 呼吸器病に依り

六 感冒に依り　七 皮膚病及腫物に依り

八 事故に依り

寄書

○日本婦女論

幽溪 大道寺直稿

論緒

支那ノ史ヲ繙キタルモノハ記臆スルナラン方士齊人除市ガ不死ノ藥ヲ求メントシテ海ニ航シタルヲ渠ガ到ルヲ願フ所ノ蓬萊ノ邦ハ之レ何ノ邦ゾ渠ガ尋ヌル所ノ仙人ノ住國ハ之レ何レノ國ゾ

渠ハ渠ガ情人ヲ慕フガ如ク渠ハ渠ガ父母ヲ尋ヌルガ如ク渺タル大海ニ航シ激浪怪風ヲ物トモセズ勉メテ到ランコトヲ願フ其邦國ハ料ラザリキ我ガ祖國ナル此ノ秋津洲裡ナラントハ

實ニヤ此ノ島國ハ山水優美ノ地ナリ芙蓉峯アリ琵琶ノ湖アリ厳島ノ仙宮アリ松島ノ風景アリ天ノ橋立ノ眺望アリ加茂ノ清水アリ嵐山ノ櫻花アリ田子ノ浦ノ月アリ若シ一々看察シ來ラバ萬斛ノ米粒ノ如ク天上ノ星辰ノ如クナルベシ山嶽重疊トシテ斷續シ亘然波上ニ出沒シ水陸森々明ナルガ如ク暗ナルガ如ク直ナルガ如ク曲ナルガ如ク白帆其間ニ隱見シ有ルガ如ク無キガ如ク遠キガ如ク近キガ如キノ景、村樹含風々更清、嶽雲吐月々殊明ノ眺メ到處之レアルニ非ズヤサレバ歐米人ハ之ヲ東洋ノ樂土トナシ身一度足ヲ此ノ地ニ入レバ戀々トシテ去ルニ忍ビザルノ情アルヲ見ル去リナガラ此ノ山水秀麗ノ島國モ二千五百有餘年間封鎖ノ中ニアリシナリ此ノ長日月ヲ空シク酣眠ノ中ニ送リシナリ

然リト雖モ社會進化ノ定理ト四時順環ノ定數トニ至リテハ假令驚天動地ノ勢ヲ以テ歐洲列國ヲ席卷シタル那翁其人モ身ハ布衣ヨリ起リ三分割據ノ働ヲ奏セシ諸葛亮其人モ出沒自在鬼神ノ如ク電光ノ如ク全國ノ英雄ヲシテ顔色ナカラシメ引テ異邦ニ皇威ヲ輝シタル豐太閤其人モ百折不撓能ク烏合ノ衆ヲ以テ精練ノ兵ヲ破リ獨立ノ基礎ヲ据ヘタル華盛頓其人モ勇猛無双到處敵ナク世界ノ歴史ニ大書セラレタル亞歴山帝其人モ流暢ノ辯ヲ振ヒ亞典ノ人心ヲ鼓舞シ流石ノ比利布ヲ避易セシメタルデモセニース其人モ千古未曾有ノ大發明ヲナシ世人ヲシテ其智力ニ驚カシメタル富蘭苦林其人ト雖モ亦決シテ抑制スル能ハザルベシ今ヤ社會ノ形勢ハ駸々又駸々其壯快ナルコト雷ノ如ク電ノ如ク風ノ如ク雨ノ如ク滔々又滔々恰モ大河ノ一時ニ決シテ下流ニ瀉スルガ如ク王良造父ガ駟馬ニ鞭チ熟路ヲ急奔スルガ如ク維新以來僅々二十餘年間ニ於テ社會ノ變化已ム時ナク轟然一發銃丸雨ノ如ク刀劍交々接スル戊辰ノ亂トナリ廢藩置縣ノ制度トナリ廢刀ノ令トナリ徴兵ノ令トナリ時ニ勇壯快活ナル征韓ノ論トナリ民撰議院設立ノ建白トナリ前原氏萩城ノ變トナリ江藤氏佐賀ノ反トナリ火輪波ヲ蹴リ月ヲ異邦ノ境ニ望ム臺灣事件トナリ或ハ知友馬上ニ對峙シ空シク英雄ヲシテ西南一片ノ烟ト化セシメタル九州ノ役トナリ國會開設ノ請願トナリ立憲同治ノ大詔トナリ政黨ノ團結トナリ志士ノ義憤トナリ霹靂一聲天外ヨリ來ル電光モ啻ナラザル保安條例ノ施行トナリ諸士ノ逐放トナリ市區改正ノ　詔トナリ市町村制ノ發布トナリ千變亦萬化活潑亦爽快其運動ノ迅速新鮮ナル豈ニ驚クベキノ現象ニ非ズヤ

此ノ進歩ハ破竹ノ勢、蛟龍登天ノ速力ヲ以テ過グル明治廿二年二月十一日ヲ以テ萬世不滅ナル吾人權利ノ金城鐵壁ナル大日本帝國憲法ヲ發布セラレ玆ニ立憲政体ノ基礎ヲ据ヘラレ愈本廿三年ヲ以テ帝國議會ヲ開設セラレントス

政体ノ變遷亦早非哉昨日ノ專制政治ハ忽然トシテ立憲政体ト化セリ其間一髮ノ隙ヲ見ズ而カシナガラ古來創業ノ易クシテ守成ノ難キハ人皆ナ之ヲ知ル始皇ノ誓言其効ナク僅々二世ニシテ而シテ滅スルモ豐太閤ノ墳墓未ダ乾カザルニ浪華ノ落城ヲ來シタルモ那翁ノ功業終ラザルニ空シク配所ノ月ヲ眺ムルニ至リタルモ守成ノ難キヲ示シタルモノナリ誰レカ知ラン春雨春風花ヲ開キ又花ヲ摧クヲ

守成ハ難シ……守成ハ難シ……誰レカ之ヲシテ完美ナラシムルモノゾ誰レカ之ヲシテ全備ナラシムルモノゾ

男姓ハ其質粗大ニシテ事ヲ執ルヤ精ナラズ時ニ尺ヲナスニ寸ヲ餘シ

丈ナナスニ尺ヲ殘スノ恐レナキニ非ズサラバ之ヲ繼續シ之ヲ完全ナラシムルモノハ之レ誰ガ責ゾ余輩ハ大聲疾呼女流ノ責任ナリト云フニ躊躇セザルベシ

余輩ハ之ヲ知ル而カシナガラ退イテ考フレバ又幾多ノ感ナキニ非ズ何ゾヤ我國婦人社會今日ノ狀態ナリ近來少シク進步ノ氣象ヲ現ハシ旭日ニ過フタル草葉ノ如キモ其裏面ヲ窺ヘバ朦朧タリ模糊タリ恰然トシテ春夜ノ月ニ似タリ試ニ之ヲ略述セバ舊來ノ男尊女卑ノ遺弊未ダ全ク社會上ヲ脫セズ男女同權ノ論ハ社會ノ表面ニ傳播シ來リ日ニ囂々タレ圧女權ノ伸張未ダ依然トシテ舊觀ヲ改メズ上流ノ貴夫人等ニハ蹈舞唱歌ニ妙ヲ得テ英佛ノ會話ヲ流麗ニ演ジ家政理財ノ術ニ熟練シ頗ル高貴ノ婦人タルニ恥ヂザル人々モ少ナカラザルベシト雖圧中流以下ノ姉妹ニ至テハ其教育僅カニ小學 校卒業生ヲ以テ極トシ其業ハ裁縫ヲナスニ止マリ三絃四竹ヲ以テ最上ノ快樂ト思爲シ燕遊會ノ何物タルヲ知ラズ唱歌ノ美妙ヲ解スルナク其喜ブ所其美トスル所ハ僅ニ藝妓娼妓ガ手古舞(テコマヒ)長歌ニ止マリ若クハ清元端歌都々逸ヲ以テ無上ノ好技ト考ヘル者多數ヲ占ム、否ナ一般皆此ノ如キニ非ズヤ例令身ハ金屋玉堂ニ晏居スルモ錦繡綺羅ニ体ヲ纏フモ決シテ財產一部ノ所有權ヲモ有スル能ハズ其最大ノ職權ハ庖厨ヲ治ムルニ止マリ其最大ノ快樂ハ歲中數度新富座ノ戯劇ヲ見ルヲ得ルノミ夫ノ爲メニ奴隷視セラレ常ニ男子壓制ノ下ニ跼蹐スルニ非ズヤ其服裝擧動ニ至リテハ軟々タル細腰ニ輕綺ノ長裳ヲ曳キ裊々タル柔步ニ綵誘ノ輕履ヲ穿チ雲鬢綠髮耿トシテ遠山ノ翠ヲ欺キ宛然トシテ巴里ノ佳人ニ恥ヂザル者モ少ナカラザルベシ其容貌体度ニ至テハ美目淸秀秋波巧ニ情ヲ凝ラシ月ノ如ク花ノ如ク西施楊妃ヲシテ三舍ヲ避ケシムベクヘーリンガザリンヲシテ愧死セシムベク小町衣通姬ヲシテ面ヲ蔽ハシムルモノ亦決シテ鮮少ニアラザルベシ然リト雖圧其剛膽智勇ニ至リテハ又夫レ果シテナイチンゲル女ボーセツト夫人ニ對シテ恥ヅル所ナキ者アル乎其才識勇烈ニ至リテハ亦夫レ果シテジヤンダーク女ローレンス夫人ニ對シテ伯仲タルベキ者アル乎恐クハ……我ガ同胞姉妹諸卿ノ情況夫レ此ノ如シ我ガ婦人社會今日ノ形勢夫レ此ノ如シ嗚呼吾人焉ゾ之ガ改良ニ從事セザルベケンヤ夫レ我國姉妹ノ如ク憐ムベク嘆ズベク悲ムベク愁ベキ者又果シテ何處ニカアル彼等ハ啞者ナリ彼等ハ愚者ナリ彼等ノ惱中マタ何物カアル彼等ノ胸中マタ何物カアル嗚呼彼等ノ如ク不幸ナルモノアル乎嗚呼彼等ノ如ク可憐ナル者アル乎此ノ如クニシテ夫レ已マバ社會ノ改良夫レ如何ンカスベキ文明ノ進步夫レ如何ンカスベキ

記シテ茲ニ至レバ吾人ハ實ニ嘆息ノ外ナキナリ而シナガラ姉妹諸卿ヨ卿等ノ社會ハ望ミナキノ社會ニ非ラズ卿等ノ優美ナル思想ハ卿等ヲ驅テ泰西婦人ノ上位ニ昇スベク卿等ノ緻密ナル能力ハ卿等ヲシテ社會改良ノ責任ヲ盡サシムルヿヲ信ズ

○國光ノ評

房陽　雲陽山人

我ガ文明ノ母ノ批評中ニ未ダ國光ヲ見ズ。小生今遉不學不識ヲ顧ミズ、大膽ニモ一評ヲ草シ之ヲ寄ス。江湖諸君ヨ、若シ余ノ評ニシテ當ヲザレバ、遠慮ナク筆誅サレヨ。

東海帝國ノ人民、貴賤ノ別ナク、貧富ノ差ナク、概シテ輕佻浮華ニ流レ、徒ニ外國ヲ崇拜シ、至優至美至剛至大ナル大和民族ノ元氣ヲ失亡セントスル時ニ當リ、國光ノ發行アル蓋シ偶然ニアラサルナリ。國光ハ

政黨宗教以外ニ立チ、其目的トスル處ハ忠君愛國ノ大義ヲ發揚奬勵スルニ外ナラズ。即チ陛下ノ御稜威ト民族ノ大和魂ヲ宇内ニ輝サントスルモノナリ。吾人其第一號ヨリ第十號迄ヲ見ルニ、博識多才ノ西氏鋭意編務ニ從事シ、劍ノ光、璽ノ德、其他心ノ柱、國ノ礎、文淵等悉ク博士大家ノ手ニ成リテ、徹頭徹尾國光赫灼、マタ一筆ノ横鎗ヲ入ルベキナシ。實ニ四方虎狼ノ邦國ニ對峙シ、優勝劣敗ノ今日ニ際シ、苟モ我ガ天壤無窮ノ皇室ト祖先トヲ敬重スル者ハ、之ヲ讀マザル可ラザルナリ。吾人ハ此國光ノ東洋ノ天地、否全世界中ニ赫々タランコトヲ希望スルナリ。

○文明のはゝに寄す

柳子 七十四才

花むしろ、文明のはゝ、一と手際。
花錦、文明のはゝ、織りあげる。
倖くも、文明の花、ながめけり。
文明の花紫や、かきつばた。

仝　はじめ

文明の、世のいさほしや、かきつばた。
文明の、一ト手際なり、花のやま。
書き盡す、文明の花、育つはゝ。

次號よりは**有栖川宮殿下**の御詠を始とし、**文學博士小中村清矩先生、畠山健先生、醫學士關場不二彦先生、中村秋香先生、山下重民先生、内田遠湖先生**等諸大家の極めて有益にして極めて面白き作物を掲げ、且小説には**寸草隱士**の「打つより撫でよ」あり、餘興には**鐵筆將軍**の「上戸好の文、下戸好の文」あり、與に讀者を感ぜしむるに足らん。

樞密院議長從二位勳一等伯爵大木喬任公題字
法制局參事官兼法律取調報告委員正六位本尾敬三郎先生敍
日本法律學士佛國法律學士司法省參事官兼法律取調報告委員從六位岸本辰雄先生敍
日本法律學士臨時帝國議會事務局書記官正七位矢代操先生敍

日本商法實用

全一冊
正價金九十錢

明治法律學校々友
淺間新五郎君
小野崎吾助君 合著

本書ハ專ラ商人間ノ實用ヲ趣旨トシ務メテ平易ノ文字ヲ用ヒ簡明ニ其意義ヲ説キ商人間ニ尤モ必要ナル商號ノ登記及ビ商人ノ義務トシテ所持スヘキ帳簿ノ種類幷ニ其義務トシテ記入スヘキ事柄及記入ニ關スル注意等ヲ一々列記シタルノミナラス會社法及ビ爲替法、仲買人規則ヲモ明瞭ニ解釋シタルモノナレハ商業家ノ爲メニハ行路ノ指南商海ノ標識トモ稱スヘキモノニシテ紳商諸君ハ勿論手代小僧ニ至ル迄通讀セサルヘカラサル要書ナリ乞フ諸君速カニ購讀シテ明年實施ノ準備ヲ怠ル勿レ
本書ハ六月初旬發賣仕候

明治廿三年五月

發行所
東京市日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地 文昌堂 長島恭三郎
埼玉縣北足立郡鴻巢町百十四番地 盛化堂 長島爲一郎

日本授產舘別科傳授部廣告

化學的醫學的元理應用

實効確證新發明諸法 教授科目

今や社會の進歩恰も旭日の東天に昇るが如く工藝技術の事業日に開け月に進む此時に際し獨立富榮を計らんと欲するものは憤發激勵目に見る所耳に觸るゝ所苟も鴻益利便なることは其れ理を究め其効を遂げ所謂天地の化育を贊くるの心を以て心となし國に益し己れを利し獨立の民たることを圖らざるべからず是れ本舘が曩に別科傳授部を開設せし所以なり今や一層進んで別科部の業務を擴張し現今泰西各國にて專ら流行する諸發明法幷に本舘主多年學修上より得し成績諸術又實地經驗上より得し諸秘法等を極めて低廉なる薄謝料にて廣く有志の諸君に傳授し以て共に與に公益濟世の妙術を普及せしめんとす

健全學及び人身審美術

● 男女全體の色を白くし且つ美艶ならしむる新法

我が日本人は身體の色黒きこと歐米各國の男女に劣りて甚だ醜し予は化學的の作用により有効無害にして全體の色を白くしきめを細かにする新法を發明したり世人に天然の黒きを黒しとして去るなかれ必ず此新法を施して身體の色を白くし且艶美ならしむべし●此法は黴毒にて色黒き人、日にやけ黒き人、顔れ色青き人、れしろい燒にて黒き人、其他一切皮膚病ある人等にも施して奏効確實也●此法は現今佛國巴里にて大に流行せる「ミュルーブ、バリ」と唱ふる

色白くする藥方

の元理を應用し且本舘多年の經驗發明を加へたる新法なり

● 腋下の臭氣を除く新法

此新法は獨逸國大醫ペリー氏の直傳にして如何なる重きわきがにても直ちに必治して再發或は他病に變ずることと決してなき新法なり

● 毛を必ずはやす新法

此法は男女の別なく全體へ毛のなき所へ必ず速に毛をはやす新法なれば毛のなくして苦む人は速に此法を施して天與の人體と全ふし給へ●此法は腫物、つぼうにてはげたる跡、やけどの跡、頭髮及はゑぎはの薄き人、男女陰部に毛なき人、まゆげ薄き人等に施して奏効最も確實なり●世に數多き賣藥等と混同視することと勿れ其効同日に語るべき比にあらず

● 健胃飲料 衛生ラム子製造新法

ラム子は現今世上に大に賞用し夏季は尤も必要なる者なり然れども市中販賣の品は往々充分に沸騰せざる者あり本舘發明の新法は衛生を主とし健胃に特効ある配合新法にて充分沸騰の力を有し且つ甘味清涼にて極めて廉價に出來上る新法なり

●悪疫豫防 消毒性臭氣防止新法

本館發明の消毒性臭氣止めは化學的新劑の作用にて汚穢の場所、大小便所、濕地等へ撒布せば如何なる劇しき臭氣にても急速に防止する特効ある新法なり、吾國に未だ此新劑を用ゆる者あらず、其製劑法は極めて簡易に且元價は至廉なり故に此法にて製劑し用ゆれば世間の臭氣止と購求するより大に德用にして其奏効は大に優越せり且つ坊間にありふれたる臭氣止の如く「コロールカルキ」、硫酸鐵、石炭酸等は少しも使用せざるにつき副作用たる不快の藥臭を發散することと決してなし

●痳病と即治する新法

此法を施せば如何なる重き慢性の痳病よても廿日以内に即治して再發することと決してなし彼の世上にありふれたる賣藥等の比にあらず一種特別の新法なれば速に試みて其偉効を知れ

●疥癬を即治する新法

疥癬は皮膚に一の小疹を發する病にして疥癬蟲と名づくる小蟲の皮下に棲息せる者なり此蟲の媒介によりて他人に傳染するを以て世人大にこれを嫌忌す今本館の發明せし即治法は極簡便よて一週間施法せば如何なる重きひぜんにても忽ち根治して再發内攻等の患ひ決してなきことを確證する新法なり

●痔疾を即治する新法

痔疾は其甚だしきに至りては遂に身體を運動そること能はざるよ至ることあり故よ宜しく本館の發明新治法よて其初期に早く之を根治すべし●此の新法にて治せし上は其病根を去るを以て誓つて再發することなし

●齒の痛を即治する新法

如何程重き齒の痛にても忽ち根治する新法なり●決して再發することとなし●世上にありふれたる賣藥等の比よあらず

●口中の臭氣を除く新法

如何なる重き口くさき人にても直ちに必治して再發することと誓つてなし又口熱を除く特効ある治法也

●ほくろを取る新法

如何ほど大なる黒ほくろにても容易に除き取り而して決してあとよなることとなき新奇法なり

●美艶漆黒 白髪染の一大新法

世上にありふれたる白髪染粉と異なり此の新法の製藥は染むるよ極簡便にて更に脱色することとなく手につかす故よ頭と不潔にすることとなく一旦此藥を用ゆれは如何程の白髪にても直に黒くなりて美艶を出す良法なり●製藥法並よ使用法一切を傳授す

●安心德用 火止石炭油製造法

通常石炭油の危険なるは已に世人の熟知する所にて誤てランプを破裂せしめし等より終に火災となり家屋財産を滅燼せしめ間々人命を失ふに至ることとある

は屢々見聞する所なり豈よ恐れざるへけんや今本館の發明せし所の火留石油製法は多年の實驗と學理的の元則應用とに依り其の良結果を得たる新法にして其製法は至極簡便に其製費は誠よ僅少にて安全なる火留石油を製し得る良法なり此法によりて製せし石油は從來の行燈の油皿へ入れ燈心を用ひて火を點ずるも油中へ决して火の移る憂なし況んやヲンプに於てをや其安全知るべきなり又油のへり方は通常の油より二割永く保ちて其光輝は通常の油より大に優れり又製するには通常の石油を需め自家よて容易に製し得るなり誠に大安心經濟德用の良法なり此法を以て製油し營業發賣せば大益あり世間に稱する火留石油等の無効なるものとは同日の論にわらず●有志者早く此法を實驗して其便利大益を知れ

●盛夏必要 **發汗防止新法**（あせどめしんぱふ）

盛夏の候は男女共身體に發汗し肌は勿論衣類よ至る迄汚穢し臭氣を發し爲めに不知不識惡病に罹る人往々有之且つ汗の爲めに夏瘡（あせも）に苦む人又多し本館嘗て之が豫防法に注目すること數年實地に就て種々已れに試み世人に驗し千辛萬苦終に今回**完全無欽奏効確實**なる**あせとめ新法**を發明したり依て之を世人よ傳授す●紳士貴婦人淑女令孃俳優藝娼妓は勿論其他總ての男女が此汗止新法を用ゆればいか程の炎暑にても决して汗に苦むことなく隨て衣類を汗臭くする患决してなし衆人列席の節などは最も缺くべからざる必要法なり且又寒暑を論ぜずさむ氣のする時行へば感冒に罹る憂ひ更になし

●**縮れ毛を直す新法**●**清酒の腐敗を防ぐ新法**●**日にやけぬ水劑製造新法**●**菓物**（桃梨林檎杏葡萄）**を貯蓄する新法**●**鶏卵の腐敗を防ぐ新法**●（簡便美味）**醤油早造新法**●**アイスクリーム製造新法**●**肝油乳劑**（レーフルココーザイ）**の新製法**（肺病患者脆弱者よ大効あり又乳なき小兒によし無臭なり）●**遺精病を必治する新法**●**醤油の黴るを防く新法**●**たん病を根切し**

即治する新法●新酒を古酒に擬する新法●甘き酒を辛くする新法●酸化酒を直す新法●酒粕にて酢を製する新法●敗腐酒にて酢を製する新法●酢の腐敗を防ぐ新法●保命酒製造法●蜜柑酒製造法●ブランデー酒製造法●リキュー酒製造法●いんきんたむしを必治する新法●白黒なまず必治新法●葡萄酒醸造の新法●そばかすを取る新法●肺病

患者の吐血を防止する新法●味淋酒を早造する新法●婦人月經白血長血を即治する新法●靴インキ製法●甘藷を以て燒酎を釀造する新法●頭髮赤きを必す黑くし艶を出す新法●にきびを即治する新法●音聲を清良に出す新法●婦人乳の少きを出す新法●香水製造法●香油製造法●蘘綿製造新法●古綿漂白新法●盛夏防腐魚類生鮮貯藏新法

●魚類の臭氣を除去する新法●夏帽子洗濯新法●癲癇を治する新法●あざを除去する新法●にきび香水製造法●せうかち即治新法●石鹼製造法●輕便印刷速寫器製造新法 以上各新法凡て一法に付き謝金壹圓五拾錢宛にて傳授すべし有志者速に申込あれ●送金は郵便小爲替にて東京神田郵便局を拂渡局とし其手形を野上三省宛郵送あるべし●右各種の發明新法は皆化學的並醫學的の元理に基き且つ多年の實驗と經たる新術なれば其の實効を奏するは堅く保證すべし傳授望の方は各規定の謝金を送金あれば其の方法逐一詳細筆記し郵送傳授すべし各法に使用する元質品及藥品は總て各地都會にて辨ずると得べし●右の外化學的に係る諸製造法並に醫學的に係る諸療治新法發明奇術數十種傳授致し候間有志の方は其望の方法明記し照會あれば詳に回答すべし●近時大阪府下の某々より各種傳授法云々と唱なへ

或は各種發明新法類集の書籍出版（但し廣告文は大に誇稱すれども其書を見れば有ふれたる古き法のみにて寸効もなく役にも立ぬ實に馬鹿氣たる子供だましの法のみを漫りに集めたる薄き雜誌の類にて十數葉なる小冊子なり）と稱し本館の傳授種目に類似したる廣告をなし虛僞の陳述を以て世人を瞞着し既に世間にありふれたる無効の方法を傳授し或は終に傳授書を送らざる者有るよしなれば世人は幸ひに彼の瞞着奸策に掛るなかれ又彼等の方法と當法とは天地の相違なれば玉瓦相混同視すと無らんを乞ふ一言な注意を需むると爾り●傳授謝金頗を低廉にし世人の誘ふ奸者あり深く注意せられよ●假令謝金は低廉をりとも其方法にして陳腐無効の法なれば却つて不廉の浪費たらんのみ俚言に安からう悪からうの語あり傳習有志者幸ひよ一考せよ●本館にて傳授する新法は何れも數百人實驗し一々其奏効を得たる實地の法なれば其良結果を得ると一々堅く保證すべし●本館にて傳授する新法は傳習濟實驗の上若し**其効なき等のことあらば何法にても傳習謝金は直に返却することを誓ふ確法なり**●先頃當府下に唱へ諸法を傳授すと稱し其廣告文の如き一々本館の通に摸倣し遲ればせながら猿の人眞似をなす者有之し固より投機師窮書生輩の一時の手段に出しものに付到底永續することなく皆朝起暮倒にして且つ其

教ゆる所の方法は實に不完全至極のものなりしを以て本館は常に之を憂しが彼等も長く奸策を逞ふする能はず現今は已に各瓦解滅燼したり

東京神田區末廣町十番地

新發明各色改良染液正法及
理化學的諸發明製法傳習所 **日本授產館**

明治二十三年六月三日

館長 野上三省

顧問員 英人 エフ、ヘンリー

此他役員姓名は略す

●諸新聞雜誌批評の一斑を

左に示す●本館主發明の各種傳授法弁に各色改良染液法は已に全國各新聞雜誌雜報欄内に於て何れも賞賛吹聽せられたるが今其一二を左に抜萃して傳習有志者の一覽に供す紙幅に限あるを以て他は凡て畧す

●讀賣新聞

●野上三省氏 各種發明新法傳授を以て有名なる府下神田區末廣町十番地日本產館々主野上三省氏が夙に其化學的理學的の應用實驗より出たる諸發明の教授を始められし以來は其効驗確實なるを以て追々傳授志願者を増加し近時益々隆盛に至れるを以て近頃二三の奸者顯はれ同氏の教授法を摸倣し無効の方法を傳ふるものある由に付き傳授志願者は僞傳者に懸ることなからん樣注意あれ且つ同館には今回洋人エフ、ヘンリー氏を雇入れ一層業務を擴張せられたり

●日本新聞

●日本授產館 神田區末廣町十番地野上三省氏の設立に係る同館は其發明せし各色改色染液法及び理化學的醫術的應用の諸發明新法共近來傳習志願者益々增加せしを以て更に役員を増し本年は尚一層精勵事業の擴張を計らるゝと云ふ又近來は外國人の傳習申込も多く已に此程北米合衆國桑港マーケット街弁に同國ランカスター府チャーロット街よりも各々傳習を請求し來りしと云ふ

●國民新聞

●日本授產館 東京市神田區末廣町十番地野上三省氏の設立に係る同館は夙に内外國人の信認を博し近來は傳習申込者引も切らず益々盛大に赴きしが本年は恰も同館創立以來滿三周年に當るを以て右等の祝意を兼ね表せんが為め一人にて一時に五種以上の新法を傳習する者へは望みにより他の一種の新法を無謝義にて添へて傳授すると云ふ

鐵筆將軍著

再版 明治之細君

石版密畫入
特別廉價
金二十二錢

發行所 盛春堂
東京本郷區富士町二番地

日本第一等名優成田屋 市川團十郎肖像
同同 成駒屋 中村鴈次郎序文
●音羽屋左太次校閲
●ふみの家琴路編述



洋裝頗美本全一册定價金壹圓
六月三十日迄特別減價金五十錢●郵税四錢●郵劵代用一割増●東京ハ芝口●大阪ハ大阪局ヘ爲替チ取組ベシ

本法は遠きは音に聞きつらん近きは寄りて見るべしと言はでも知るき看客は能くも御名識みありつらん世界を跨に掛け歩く文の家琴路てふ人が永く吾妻に隅田川淸き流れの鴨川や淀の川瀨や彼處此處と有らゆる名有たる國々を驅り回りて種々と見聞き問ひ聞きなしたるを更に試し行ひて爰よ漏さず編み集め世の不品

量の人等を美麗よき人と矯め直し美麗よき人は一際に小野小町や照手姫業平朝臣方々の光り輝く美婦男と成さんず爲の老婆心我國人の誰知ならぬ當時日の出の成駒屋其他の主も贊成して爰に一筆入きんとて態々序文を綴られぬ斯る次第の譯なれは余り其々書ずとも世に有觸れたるでも本と御同視あるの憂なし偏に願ひ待べるには早く美麗よき方々と成らきんとを願ふよなむ

目錄大意

緒說●婦人の言語動作●西洋服着用法●茶道早習

醜男を美男に變する術

生花の由來並其秘傳●西洋束髮の種類及結方●日本風の髷起原并其種類及結方●紅に白粉の由來及其秘傳●眉毛の作り方

醜女を美女に變ずる術

顏色の青きを櫻色に變する法●丸き顏を細長く瓜實顏に變ずる法●下り目上り目を通常よする法●低き鼻を高くする法●小さき目を大きくする法●大き目を通常よする法●目と眉毛の間を廣く又は狹くする法●長き首を短くする法●短き首を長くする法大き首を細くする法

老男女を若男女に變する術

厚き唇を薄くそる法●せむしを匿す法●鳩胸を匿す法●大きなる口を狹くする法●小さき口を通常よする法●出尻を柳腰にする法

顏の恰好により髮を結法

皺を延す法●あばたを治する法●白髮を黑髮よ變する法●低き脊を高くする法●高き背を通常にする法●張りたる肩を撫肩よする法●やせたる身体をこやす法●こゑすぎたる身体と恰好よくやせる法●湯の使ひ樣●湯化粧の法●黑き顏に白粉を施す秘法●日よやけぬ法

顏の恰好により眉毛の作り方

顏及肌の色と白く艶を出す法●外輪を内輪にする法●内輪を外輪にする法●汗の出るを防く法●聲を出す法以下數十法は是と略す

發行所　東京々橋區銀座二丁目東中通十四番地　備後屋書房●大阪高麗橋電信局前　明文社

商標

諸ねつ特効藥

熱丸

藥價　三十粒入　金五錢　百五十粒入　金二十錢

●流行性感冒●瘧歇熱●天然痘●腎臟炎●腸窒扶斯○實布的里亞●慢性僂麻質私●麻疹●筋肉麻質斯●發疹窒扶斯●急性關節僂麻質私●其他諸般の熱病に特効あり

本劑は服用易からしむる爲に最良糖を衣とし製調せし良藥なればその味ひ極めて美にして小兒或は藥嫌ひの者又嘔氣の患者に適切せり

本舖　大坂市東區伏見町堺筋角　谷回春堂謹製

代理店（つやふきん本舖）　東京市京橋區銀座一丁目　佐々木玄兵衛

特約大販賣

（五臟圓本舖）　東京市日本橋區兩國米澤町一丁目七番地　大木口哲

（淺井萬金膏本舖）　東京市日本橋區上槇町三番地　安川榮次郎

各府縣大阪賣取次所

村松町岩涙●下谷池之端守田●銀座二丁目岸田●瀬戸物町玉置●元大坂町高木●室町三丁目角資生堂●小網町四黒澤●通三丁目小山●本石町四西山●鎧橋通阪本町角德田●本石町二森谷●馬喰町一平尾●神田大通鍋町二十二番地大木支店●箱崎町二丁目大木支店●末廣町菅保●神田表神保町伊澤●猿樂町一吉村●柳原通富松町伴●深川高橋際東元堂●築地二丁目角近藤●小川町通笠井●京橋區桶町増田●麹町六丁目近又●四谷門外灰吹屋●吉原大門口中根●牛込神樂坂尾澤●麹町招魂社脇雨宮●深川洲崎辨天町小池●横濱尾上町四鈴本●横濱伊勢崎町二西海●信州上田原町電信局前山崎●信州南佐久郡穂積村村田●仙臺新傳馬町櫻井●横須賀町里高大郎●横須賀旭町つやふきん支店豐平や●仝港町久加屋五郎吉●仝汐の町山本賀平●仝勉見橋際石川茂平●野洲足尾赤澤町葛生彌四郎●盤城西白川矢吹中西力藏●下總佐原澤田嘉一郎●仝佐倉新町木川直●仝飯田町和泉屋太次兵衛●上州富岡中町近江屋吉兵衛●甲府肴町三丁目村田屋七右衛門●猶此他各府縣諸賣藥店及藥舗ニ差出有之候間最寄ニテ我製劑御實驗上御購求ヲ希フ

たむし患者に案内

我療法は伯爵某老公の所謂 **獨得** の神法にして決して再發、內攻、留傷等の危險なく如何なる痼疾だも容易に根治するは數千全治者の治く證認せらるゝ所豈よ復自賛を要せんや

他療にて治癒せざる患者は速に實驗せよ◎療法に關する照會は往復葉書又は郵券二錢を要す

東京神田錦町一丁目一番地河岸通り

專科 **頑癬治療所**

小生這回自宅に於て支那哲學及び文學を教授し兼ねて文詩の刪潤を為す此段好學の士よ告ぐ

本郷區駒込西片町十番地よ四十八號

內田周平

速記法 自宅獨習生 **募集** 月謝二十錢二ヶ月卒業規則入用者ハ二錢郵券ヲ投スベシ

東京下谷區徒町三丁目三番地

速記學專修所



民法及商法釋義發刊ノ趣旨幷豫約方法

大審院檢事
法律取調報告委員
明治法律學校
東京專門學校
日本法律學校
講師

日本法律學士
佛蘭西法律學士
從五位
磯部四郎先生著

大日本新典 民法釋義

全十六册

本書ハ廿三年五月廿三日第壹號發兌
本書ハ毎月(十日 廿三日)二回必ス刊行
本書ハ八ケ月間則チ十二月廿三日完成
本書ハ紙質ノ善良ナルヲ撰ヒ且印刷ヲ鮮明ニシ誤謬ナキヲ旨トス

一 全部紙數大凡三千四百頁
一 壹册紙數二百廿頁餘
◎ 毎編正價金四拾錢外ニ遞送費金二錢
一 全部拾六册金五圓八十錢

豫約法

○豫約廉價壹册金三十五錢
○全四册前金壹圓三拾六錢(八册前金貳圓六拾錢)(十六册前金五圓)
○右ノ外壹册ニ付遞送費金二錢ヲ要ス
○全部十册以上前金御注文ニ候ハヾ遞送費ハ弊舖ニ於テ支辨スヘシ
○豫約申込ノ節ハ必ス送金アルヘシ
○郵便爲換ニテ御送金ノ節ハ必ス證書ニ(東京本局)又ハ(武藏鴻巣)ト記入アルヘシ
○郵劵代用壹割増ノヿ
○豫約斯限ハ來ル十一月二十日迄トス 但シ期限後ハ必ス正價ニ復スヘシ

民法トハ各人相互ノ權利義務ヲ規定シタルモノナリ故ニ此交渉頻繁ナル社會ニ安息セントスル者ハ少ナクモ其大体ニ通セスシテ可ナランヤ蓋シ該新典タル我國古來ノ慣習及ヒ歐洲諸國善法中ノ粋ヲ拔キ別ニ一体ヲ成セル者ニシテ四編合計正文凡壹千三百十九條アリ

仝先生著

大日本新典 商法釋義

全十冊

○廿三年五月十五日第一號發刊
○毎月(十五日)(廿八日)二回刊行シ九月廿八日完成
○全部(十卷)紙數大凡二千七百頁(一冊二百七十頁餘)
○正價一冊金五十錢外ニ遞送費一冊ニ付金二錢
○全部(拾冊)金四圓五十錢外ニ遞送費金二十錢

豫約振價
〔○〕
壹册前金四拾五錢(五冊分前金貳圓拾五錢ニ(十冊分前金四圓)右ノ外遞送費一冊ニ付金二錢ッヽヲ要ス
全卷十冊以上前金御注文ニ候ハヽ遞送費ハ弊舗自辨ノヿ 象約期限八月廿日迄(以下民法ノ例ニ倣フ)

商事ハ民事ノ一部ニ外ナラス然シテ商事ニ在リテハ特ニ迅速信實安全ヲ貴フ是レ民法アルニ拘ラス更ニ商法特別ノ規定ヲ要スル所以ナリトス我國固ヨリ商事ノ慣例畧々備ラサルニアラスト雖モ只其不規則タルヲ免レス故ニ此新法ノ公布ハ商業社會ノ秩序ヲ一新スルモノト謂フヘシ正文凡壹千零六十四條アリ右二大法典タル實ニ汎ク法律學ニ達スル者ニアラサルヨリハ其意義ヲ表白スルヿ能ハサルナリ弊堂是ニ見ルアリ切ニ磯部四郎先生ニ乞ヒ詳細之カ註釋ヲ施シ適宜冊ヲ分チテ漸次刊行セントス抑々先生ハ明治八年官命ニ依リ佛國巴里府ニ遊ヒ留學六年歸朝以來專ラ法典編纂ノ事務ニ鞅掌セラレシモ公退ノ暇著書頗ル多ク其學識ノ深遠文章ノ緻密世夙ニ定評ノアルアリ且民法商法ノ蘊奥ヲ討究セラレシヿ人ノ能ク識ル所ナレハ此書ノ善良ナル多言ヲ竢タスシテ明カナリ又世間普通ノ註釋或ハ名家貴顯ノ題字序文等ヲ掲ケシ投機者ノ一夜作ニ成リタルモノヽ比ニアラス江湖ノ人士先ッ第一卷ヲ得テ此廣告ノ誣言ニ非サルヲ知リ賜ハンヿヲ希望ス

◎兩書ハ遞信省認可ナルヲ以テ遞送費ノ廉ノミナラス極メテ迅速ニ到達スヘシ

發行所(東京市日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地) 文昌堂 長嶋恭三郎
(埼玉縣北足立郡鴻巣町百十四番地) 盛化堂 長嶋爲一郎

(遞信省認可)

明治二十三年六月三日印刷出版

(東京市神田區柳原河岸鉛巻堂印刷)